

ESOPO NO FABVLAS

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

例年、夏の朝、クマゼミのシャーシャーという大合唱がとてもうるさかったが、今年はクマゼミの合唱団のメンバーが少なかったように思う。その代わりと言ってはなんだが、筆者が勤務する大学のキャンパス内の草むらでキリギリスが盛んに声を立てていた。成虫になりたてのものから色づきもしっかりとした成虫に至るまで、非常に多くのキリギリスに遭遇した。

キリギリスと言えばイソップの寓話の『アリとキリギリス』を思い出す。読者の皆さんもよくご存知だろう。冬の寒さが身に染みるころ、夏の間をせっせと食料を溜め込んだアリに、キリギリスが食料を分けてくれと頼んで助けてもらおうお話である。

このイソップの寓話は各種の記録や報告によれば、元はギリシャの話で、登場するのはキリギリスではなくセミだったそうだ。それがドイツ、英国などセミが生息しない国に伝わった時、現地でポピュラーな昆虫であるキリギリスに置き換わったとのことである。我が国にもたらされたのはイエズス会の宣教師を通じてであり、宣教師の日本語教育用、あるいは日本人信者への教育用だったなどの説がある。大英図書館にのみ存在する 1593 年にローマ字で印刷された ESOPO NO FABVLAS (イソポのハブラス、天草本 伊曾保物語) の副題に、Latinuo Vaxite Nippon no cuchito nasu mono nari (Latin を和して日本の口と成す物なり) とあることから、宣教師が読み聞かせるための教材だったのではないだろうか。その中にはアリとセミの話として収録されている。

原文は Aru fuyuno nacabini aridomo amata anayori gococuuo daite fini sarashi, cajeni fucasuruuo xemiga qite coreuo morōta:…と続く。この話ではアリはセミに少量の食料を与えたが、その際、さんざん嘲ったとある。ギリシャ語もしくはラテン語の原文にはないと思われるが、このローマ字文の下に、Xitagocoro (下心) とあり、人は力の尽きないうちに努力して貯えをしておかないといけない。慰み事にうつつを抜かしていると先にきつと難を逃れることができないときがくる、などと教訓が述べられている。

これを手本にしたかどうか不明であるが、明治末期から大正にかけての絵本ではアリはキリギリスに食料を与えず、夏の間を歌って楽しく過ごしたのだから冬にはダンスでもして過ごしたらいい、と追い返している。思えば、人は勤勉

でなければならぬ時代であった。やさしく食料を分け与えるお話が広がっていくのは、戦後になってディズニーのアニメが出現するようになってからかもしれない。

この寓話にはいろいろ思うところがある。キリギリスやセミとアリと体の大きさの比較を行えば、イラストに示したような状況はあり得ないし、そもそも食料についての内容が大きく異なる。さらにはアリが木枯らしの吹く季節にキリギリスやセミに遭遇することはほとんどない、など、論理的な無理が多々あるのだ。しかしそれがあっても話を成立させるのは我々人間に創造性があるためである。そこに何らかの教育的配慮を入れるかどうかは作者の裁量と社会や文化の状況に依存する。だから突き放したりやさしく対応したりと、様々な筋書きが存在するのである。

お盆も過ぎ、大文字の送り火も見終わった8月も下旬、交尾も終わり、寿命の尽きたクマゼミの亡骸が地面のあちこちに散乱し、アリたちが小さく分解しながら巣に運んでいる様子を見かける。それはセミがかわいそうというより、典型的な食物連鎖の側面である。キリギリスとて同じこと。キリギリスが餌をくれないアリに、どうぞ僕を食べてください、というかどうかは創作の世界であって、我々を取り巻く自然の大きな営みにすぎない。それを教訓的に勤勉たれ、他人にやさしくといった寓話にしつらえることは果たして妥当なのだろうか、とふと考えた。

昼日中セミを追いかけている子供たちはともかくとして、ネットゲームにいそしむDX時代の子供たちには、こうした教訓的な寓話がどこまで響くだろうか。それよりも、自然のありのままの姿を見せ、そこで粛々と行われている自然の摂理に触れさせる工夫をすることこそ、今必要なのではないだろうか。それこそが生きとし生けるものをリスペクトする社会を構築するための第一歩と思うが、いかがか。

*イラストは Charles H. Bennett (1857 年) による。